
異世界の生活

するめ315

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の生活

【著者名】

ZZマーク

N1027T

するめ315

【あらすじ】

異世界での生活は、未知と不満でいっぱいです。

『異世界の朝』『異世界の人間』の続編です。単体ではありませんので、前々作、前作を読むことをお勧めします。

(前書き)

異世界の○○シリーズの最新作。楽しんでいただけたら幸いです。

とある午後の冒下がり

一般サラリーマン家庭の三兄妹の末っ子として生まれた私には、豪華すぎるほどアフタヌーンティーのセットを皿の前に考えるのは……今置かれている現状である。

この世界に来て早3週間という日々が過ぎた。

バッシュの気遣いのかいあってか、生活はとても快適だ。

食事のほとんじが、日本でいつ洋食のような感じで、ひとつもおかしい。

さすがお城つて感じだが、ときどき見た瞬間に食欲をなくすような青や、紫の物がでる。

口に入れてみればたいていはおいしいのだが、入れるまでの勇気が図り知れない。

服はお城だからなのかドレスが基本。

現代の女子高生には少し動きにくこづえに、コルセットは少し苦しい……。

あとなんでか知らないけど、胸の露出が激しい気がする。いつみつのが流行りなのか……。

勉強はやつぱり難しい……。

文字は、言葉が通じるからもしかして……と思ついたら読めたのでラッキーだったが、書きはビミヨー。
しかし、問題はこれだけではなかつた。

礼儀作法は身体動かすことだからまだいいとして、歴史。これが問題だつた。

貴族同士のバックグラウンドも絡めて、話されるからわけがわからぬ。

私、歴史とかやりたくないから理系クラスに進んだのにな……。

あと、お風呂。これはなかなか曲者だつた。

この国の主流は蒸し風呂で、あかすり?みたいな奴だつた。気持ちいいんだけど……なんか物足りない。湯船が恋しい。このことをバッシュに話したら、なんとかしてくれるつて言ってたから、もう少しの我慢。

バッシュから私のお世話係に侍女と護衛が付けられた。

侍女はラナン、ナージャ、イルミナの3人。3人ともすごく美人で可愛い。護衛はターナとラシエル2人、こちらも頼りになる姉御肌の美人さんだ。綺麗なモノ好きの私としては、バッシュも含めて、いい目の保養になつている。

侍女も護衛もいらないって言つたんだけど、客人をもてなさない国だと思われる困るつて、押し切られた。

百歩譲つて、侍女はわかる。恥ずかしいけど、お風呂とか、着替えとか慣れないし、一人ではできないから。

でもなんで護衛……。バッシュは危ないからだつていつてたけど、なんで危ないんだろう……。

聞いた話によると、女性の騎士は少なくてすく貴重らしいのに……。

しかも、危ないからつて、この世界に来てから3週間、バッシュ抜きで一度も部屋から出してもらつてない。

「こんななんじや、私の本来の目的が果たせないよ。

城下の街だつて見てみたい。
せめて、ストレス解消に好きな時に庭に出るのぐらに許してほしい。

「はあ……」

思わずため息がこぼれた。

「どうかなさいましたか。勇姫様。」

近くにいた侍女のラナンが反応した。

「う~ん。だつて暇なんだもん。部屋の中ばっかりなのはストレス
たまるよ……。」

「申し訳ございません。陛下からお部屋から出でないようついで言われ
ておりますので……。」

「……うん。それはわかってるよ。無理矢理部屋から出で、ラナン
達が怒られるのは困るしね。」

「勇姫様……。」

ラナンにすこく心配をかけてしまつたみたいだ。

しかし……不謹慎かもしれないが、美人の憂い顔はなんて絵になる
んだろう……。

カメラ欲しい。写真撮りたい。

「 さま。 ささま。 勇姫様。」

「 は、 はい。」

「大丈夫ですか？勇姫様。どこか御加減でも悪いのではないですか？」

？」

「う、ううん。平気だよ。」

「なら、よろしいのですが。」

「本当に大丈夫だつて。ところで、呼んでたでしよう？なに？」
「はい。お暇だとおっしゃられた件ですが……陛下に申してみてはどうでしょう？勇姫様のためであればお時間を作つていただけると思いますし、最低限お庭ぐらいの許可はいただけると思います。」「そうかなあ。」

「ええ、陛下は勇姫様からのお願いは断れないですから。」

「ううん。じゃあ、夕食のときにも頼んでみようかな。」「それがよろしいかと思います。ところで、勇姫様。」

「ん。なあに。」

「今朝も夜着を着ていらつしゃいませんでしたね。」

「……だつて、裸の方が気持ちいいんだもん……。」

「……勇姫様……お願ひですから夜着をまとつてお休みください。獸を刺激し、要らぬ火の粉を被ることになりますよ。」「……それは、どういう意味？」

「いいえ、なんでもござこません……。」

そのまま、火の粉発言は流されてしまった。

しかし、私は、この発言を深く追求しなかつたことをのちに後悔することになる。

気付かなかつたのだ、侍女たちが、護衛の騎士までもが執拗に私に夜着を着せようとしている理由を。

知らなかつたのだ、バッシュが秘密の通路を通つて夜中にこの部屋

にかよつている」と。

侍女や護衛たちが、こんなにも私を守つとしてくれていたの

。

(後書き)

続くのか?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1027t/>

異世界の生活

2011年5月9日09時48分発行